

43090

教科書文庫

4
810
32-1940
2000.0
36401

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

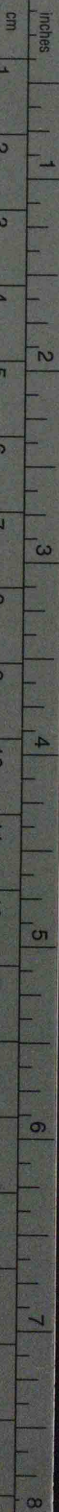


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9  
Mo14  
資料室

農村用

高等小學讀本卷一

文部省



375.9  
M210

農村用



高等小學讀本卷一

文部省



目録

第一課	昭憲皇太后御歌	一	第十六課	フェルデナンド、マゼラン	五十九
第二課	太田道灌	四	第十七課	征衣上途	六十九
第三課	先づ農を重んぜよ	八	第十八課	西洋紙の製造	七十四
第四課	松の根	十二	第十九課	植附前後の様子を報ず	七十八
第五課	蒔かぬ種は生えぬ	十五	第二十課	害虫と其の敵	八十
第六課	盤珪禪師	十九	第二十一課	夏の田園	八十六
第七課	野火止の用水	二十一	第二十二課	船津傳次平	九十
第八課	洞庭湖	二十六	第二十三課	漁船歸る	九十六
第九課	契約	三十	第二十四課	廣瀬武夫の手紙	百一
第十課	山村	三十四	第二十五課	スバルタ武士	百五
第十一課	教へ草	四十一	第二十六課	統計	百十一
第十二課	動物を愛せよ	四十二	第二十七課	筏流し	百十八
第十三課	麥秋	五十	第二十八課	瀧澤馬琴の苦心	百二十三
第十四課	海の朝	五十三	第二十九課	足柄山	百二十九
第十五課	我が國の水産業	五十五	第三十課	郷土	百三十一

高等小學讀本 卷一

第一課 昭憲皇太后御歌

天つ日のてらすが如く隈なきは

すめらみくにの光なりけり

おこたりて磨かざりせば光ある

玉も瓦にひとしからまし

底にしくさゞれもみゆる池水の



きよき心にならひてしがな

すゝみゆく萬の民の手わざにも

見ゆるは國のさかえなりけり

なごりなく霞は晴れて朝ひばり

あがるかぎりもみゆる空かな

種まきていくかへにけむ道のべの

苗代水のそこ青みたる

草とりし晝のあつさもわするらむ

門田の月にすゝむさと人

こがひする家としられてふくるまで

火かげぞみゆる小山田の里

八束穂のたりほの上にしたづきし

人のちからもみゆる秋かな

里の子が棕の實ひろふ山かげの

夕暮寒しこがらしのかぜ

第二課 太田道灌

古の眞の武士は文武二道に心掛けたり。されば戦國争亂の世にも、風流のたしなみありし人少からず。太田道灌の如きも其の一人なり。

道灌は初め左衛門大夫持資といひ、上杉定正の家臣なり。幼時より氣力盛にして人に屈せず、武道を好み、未恐しき少年よとらはさせられぬ。壯年の頃鷹狩に出で、雨にあひてとある民家に入り、雨具を借らんとするに、少女出て來りて、一言の答もなく山吹の花一枝を差出す。持資其の意を解せずして歸りしが、後或人の語りて、それは

七重八重

花は咲けども

やまぶきの

みの一つだに

なきぞ悲しき

といふ古歌の心なるべし

といふを聞きて、始

めて身の無學を恥ぢ、そ

れより文學に心を寄せ

たりとぞ。

後武藏國江戸の地に城を



築き、城内に文庫を設け、史籍歌集、醫書、兵書等數千卷を  
をさめ、暇あれば書を読み歌を詠じたりといふ。かつて  
將軍義政に見えんとて京に上りし時、後土御門天皇勅  
して武藏野の様を問はせ給ふ。道灌歌を以て答へ奉る。  
露おかぬ方もありけり夕立の

空よりひろき武藏野の原

又隅田川の都鳥はと問はせ給ふに、

年ふれどわがまだ知らぬ都鳥

隅田川原に宿はあれども

さらば汝が館の風景はとありしに、

我がいほは松原つゞき海近く

富士の高根を軒端にぞ見る

と答へ申ししかば、叡感淺からず、御製を下し給ふ。

武藏野はかるかやのみと思ひしに

かゝることばの花や咲くらん

或時の戦に、定正に従ひて夜海岸を通りしに、定正潮の  
満干を知らず。道灌いふ、潮干たり、たやすく進むべしと。  
定正其の故を問へば、道灌

遠くなり近くなるみの濱千鳥

鳴く音に潮の満干をぞ知る

といふ古歌ありと答へたり。

道灌の築きし江戸城は、後徳川氏之を修築して、歴代將

軍の居城とし、當時の松原つゞきの寒村は、何時しか繁華なる江戸の都會となれり。星霜四百年、明治の大御世に宮城を此處に定め給へるは、道灌の名譽此の上なしとやいはん。

第三課 先づ農を重んぜよ

人は一日も飲食せずにはをられぬ。日々の食料となる米・麥・野菜や、肉類・鶏卵・牛乳など、一として農業の賜でないものはない。

人は着物なしでは暮されぬ。其の着物の原料たる綿・麻・絹・羊毛など、是等もまた農業なくしては産出されないものである。

人は家を要する。其の家を建てるには、種々の木材が必要である。是等の物もやはり農業にまたねばならぬ。人間の生活に最も必要な衣服・食物・家屋の原料を作るのが農業である。以上、農業は他のあらゆる生業に比して、最も根本的のものであるといはねばならぬ。着物がほしいといふ場合に、我々が呉服屋から反物を買つたとする。其の反物は呉服屋で織つた物ではなく、機織工場で織つた物である。其の織る絲は、製絲工場や紡績工場などで製した物である。しかしながら絲の原料たる繭や綿などは、農業の力にまたねば出来ない物である。農業がなかつたならば、繭もなく、綿もなく、製絲

工場もなく、紡績工場もなく、機織工場もなく、呉服屋も  
ないわけである。

我が國は、神代の昔から既に農業を以て國を立て、隨つ  
て之を重んずることが一通りてなかつた。瑞穂の國と  
いふ古稱のあるのも、其の所以であり、歴代の天皇の最  
も鄭重に行はせ給ふ大嘗祭だいじやうさいを始め、一般の祭事に農業  
に關するものの多いのも、其の所以である。今は廣く生  
業といふ意味に用ひられてゐる「なりはひ」といふ語は、  
もと農業の意味であり、民といふ漢字を當てる「たみ」と  
いふ語も、農民の意味であるのを見ても、如何に古代か  
ら農事が主とせられて來たかがわかる。

農業は今日及び將來においても、益之を重んぜねばな  
らぬ。若し農業が衰へて他の業のみが盛になつたらば、  
外見は文化燦然たるやうに見えても、實はしんを白蟻あかあ  
に犯されてゐる木材のやうなものである。故に國家は  
十分に農業を保護し、尊重せねばならぬ。之に従事する  
農民も、また自ら其の業務の如何に貴きかを自覺して、  
大いに自重せねばならぬ。

農民が自重して、徒に都會の流行を追はず、かへつて農  
村が質實の風を以て國內に範を示すに至つて、始めて  
國家は健全に發達し得るのである。普佛戰爭にパリ  
ーが包圍された時、フランスの農民は、たとひパリ  
ーは陷



落しても、フランスは我々農村にある、農村の亡びざる限り、フランスは永久に亡びないと言つたといふ。農民たる者は此の氣概ががなくてはならぬ。

第四課 松の根

松の木に囲まれた家の中に住んでゐても、其の根が地中でどうなつてゐるかはあまり考へてみたことがなかつた。美しい赤褐色の幹や枝や、清らかな緑の葉が、松の木全體であるやうに私は思つてゐた。雨が降ると幹や枝の色は、落ちついたうるほひのある鮮かさを見せる。緑の葉は、涙にぬれたやうなしをらしい色つやを増して来る。雨の後で太陽が輝き出すと、如何にもさわ

やかな氣分が木に満ちくゝて、あたかも生の喜が其處に躍つてゐるやうに感ぜられる。松の木といへば私には唯それだけのやうに見えた。

然るに或時、私は半ば崩された小高い砂山の下にたゞずんで、砂の中に食込んだ複雑な松の根を見たことがあつた。地上と地下の姿、それは何といふ甚だしい相違であらう。すくくとのびた幹、大空にさし交す枝、樂しさうに揃へた葉先、是等に比べて地下の根は、戦ひもがき、苦しみ、精一ばいの努力を盡くしたやうに曲りくねり、枝から枝と分れた無数の太い根、細い根を以て、一せいに大地にしがみついてゐる。私は松の根が地下にあ

ることを知つてゐた。しかしかういふ姿を目の前にま  
 ざまざと見た時、思はず驚異の眼を見はらぬわけには  
 いかなくつた。私はこれまで松の木に此のやうな地下  
 の苦しみが不斷にあることを、一度もはつきりと思ひ  
 浮かべてみたことがなかつたのである。たま／＼烈風  
 の吹きすさぶ時に、私は松の苦しみの聲を聞いたこと  
 もある。炎熱の日が一月以上も續いた時に、私は松の苦  
 しさを様子を見たこともある。しかし其の叫び聲や  
 しをれた様子も、其の時機さへ過ぎればすぐにもとの  
 快活にかへつて、苦しみの跡を殆ど遺さなかつた。しか  
 も松は我々の目に秘められた地下の營を、一日も怠つ

たことがないのであつた。あの美しい幹も葉も、五月の  
 風に吹かれて飛ぶ花粉も、實は此のやうな苦しい營が  
 あつて始めて見事に出来るのである。

成長を欲する者は、先づ根を確に下さなくてはならぬ。  
 上にのびることをのみ欲するな。先づ下に食入ること  
 に力めよ。(和辻哲郎「偶像再興」ニ據ル)

第五課 蒔かぬ種は生えぬ

「蒔かぬ種は生えぬ」といふ諺は、誰でも知つてゐること  
 であるが、生物界の現象中には、ともすると蒔かぬ種が  
 生えるやうな考を起させることがある。それで今でも  
 世間には、往々のみがわくとか、しらみがわくとか言つ

てゐる人がある。もつともかういふ考は我が國ばかりでなく、何處の國にもあつたのであるが、二三百年以前から追ひくゞ實物に就いて物を研究する風が起り、又顯微鏡を用ひて細かい物を調べることが出来るやうになつた結果、だんくゞ其の誤であることがわかつて來た。例へば昔は、うじといふものは、肉などが腐ると自然に其處にわくものであると信じてゐた。ところがイタリヤのレヂといふ學者が、細かい金網で肉をおほつてはへが附かないやうにして置いたところが、幾日過ぎても、どんなに肉が腐つても、うじが一びきも生じなかつた。そこでうじは決して腐つた肉からわくもので

はなく、全くはへが來て産みつけた卵が孵つたのであるといふことが確になつた。かうして實物に就いてだんだん研究してみると、元は自然にわくと思はれてゐた蛔蟲（おび）やさなだ蟲も、種なしに生ずるものではないといふことがわかつて來た。

又山間に新しく掘つた池などに、鰻（うなぎ）が居たりしゞみ（しゞみ）が居たりすることがある。ちよつと考へると、鰻やしゞみがかういふ池に居るやうになるのは、全く其の場所にわいたとしか思はれない。しかしよく調べてみると、やはりわいたのではなく、外から來たのである。鰻は元來海中で孵るもので、初は透明な白魚のやうなものであ

るが、だんく、體がしまり、色も次第に黒くなつて、いはゆる針鰻になる。此の針鰻は幾千も幾萬も群をなして川をさかのぼり、次第に細い溝などへ進み、雨でも降れば、路上や草の間の水たまりを傳はつて、何處までも進んで行く性質を持つてゐる。であるから鰻は山間の新しい池にでも達することが出来るのである。又しゝみのやうな貝類は、其の二枚の殻で、がんかもなどの羽毛や足に附着することがあるから、餘程隔つた處までも運ばれて、其處で繁殖することは決して珍しいことではない。

生物學上「蒔かぬ種は生えぬ」といふことがわかつたお

陰で、人間の生活の上に大きな利益がもたらされた。近來發達した消毒法や食物を罐詰にして長く保存する方法なども、全く此の理を實地に應用したものである。若し病氣や腐敗のもととなる微細な生物が、種がなくても自然にわくものであつたら、かういふ方法は何の役にもたゝないはずである。(丘淺次郎「博物簡易動物學」ニ據ル)

第六課 盤珪禪師

盤珪禪師は播磨國龍門寺の住持にして、識徳一世に高く、教を請ふ者常に門に満てり。或年佛道修行の催ありし時、來り集る者頗る多かりしが、其の會衆中、金品を失ふ者數人に及べり。然るに間もなく一僧の所爲なるこ

と明らかになりしかば、會衆一同禪師に言ひて、直ちに之を追放せんことを請ひぬ。禪師「よし」と其の旨を聞入れしかど、更に追放のことなかりければ、數日の後、會衆は總代を以て再び此の事を言出でたり。禪師、此の度も「よし」と承諾したるのみにて、少しも彼の僧を追ふ様子なし。かゝること尙三度四度に及びしかば、會衆大いに立腹し、若し彼の僧を追放し給はずば、我等は一人も残らず退散致すべし」と言出でぬ。其の時禪師一同に向ひて、退散したしとならば、心のまゝに退散せらるべし。御身等の如く修行を積み行正しき人々は、何處に行きても宜しかるべし。されど彼の僧は、我捨去らば

誰か之を教へ導くべき。此の度の催の如きも、かゝる惡心ある者を教化せんためなれば、盜をしたればとてみだりに追ふべきにあらず」と諭しければ、會衆も大いに感じて、申出を取下げたり。彼の僧も亦此の次第を聞き、禪師の徳に感泣し、己が前非を悔い、一同の前に出て、涙ながらに惡事を懺悔し、其の後道德堅固の僧となりしとぞ。

第七課 野火止の用水

東京の西北數里に野火止といふ處がある。今は埼玉縣北足立郡大和田町に屬してゐるが、見渡す限り打續く畠の間には、森あり丘あり、家あり流あり、春は菜の花麥

の緑、秋はすゝきの波、雑木の紅葉、武藏野の面影が今に残つて、見るからに野趣に満ちた眺である。昔此の附近一帯は、彼の智慧伊豆といはれた松平信綱の領地で、其の菩提寺平林寺も此の野火止にある。

平林寺の門をくゞつて、薄暗いばかりに茂つた楓の下を進むこと約二町、本堂について右折すれば、杉や檜の生ひ茂つた林の奥に、信綱の靈は靜かに眠つてゐる。敷石の苔をふんで此處に詣でる者は、あたりの靜かさを破つて、玉の如き水が勢よく流れてゐるのを見るであらう。有名な野火止の用水とは即ちこれで、此の水を引くに就いては、おもしろい話が今に傳へられてゐる。

元來野火止一帯は、土地高く、水利に缺け、土やせて、見るからに貧しい村であつた。信綱が川越城主として此の地を領してゐた時、代官安松金右衛門は、新に堀を掘つて玉川の水を引けば、必ず田畑が出來ると申し出た。そこで信綱が其の費用の見積を尋ねると、三千兩あればよいといふ。當時の三千兩は非常な大金であるが、信綱は、此の爲に後々の人まで利益をうけることが出來るならば幸である、と直ちに堀を掘ることを安松に命じた。安松は命を奉じて數百人の人夫を督し、いよく工事に着手した。さうして今の中央線立川驛の北方一里ばかりの處から、此の野火止を過ぎ、志木町の新河岸川

まで六里の間に堀を通じて、玉川の水を引くことにした。

工事はやがて見事に落成したが、しかし意外にも一滴の水も流れて来ない。信綱は之を見て安松をなじると、安松はとにかく明年までの猶豫を願ひ出た。が、翌年になつても水はやはり来ない。こゝに至つて信綱は、安松が地勢の高低を考へずに工事を進めたものとして、其の手落を責めたが、安松は尙自分を信じて疑はない。元來此の附近は土地が乾き風が烈しいために、これまで非常に土ぼこりが多く、客のある場合には、必ず座敷を掃いて入れなければならなかつた。然るに今年はその

な事が全くないのみならず、野菜の出来のよいことも例年と異なつてゐる。これは水分が地をうるほしてゐるため、確に彼の堀のお陰に違ひない。何とぞ更に一年の猶豫をと願ひ出た。然るに翌年の夏、一夜大雨が降ると、奔流が水音高く進み來つて、忽ち六里の堀にみまぎつた。信綱は始めて安松が自ら信ずることの強いのに感歎し、且厚く其の功を賞したといふ。

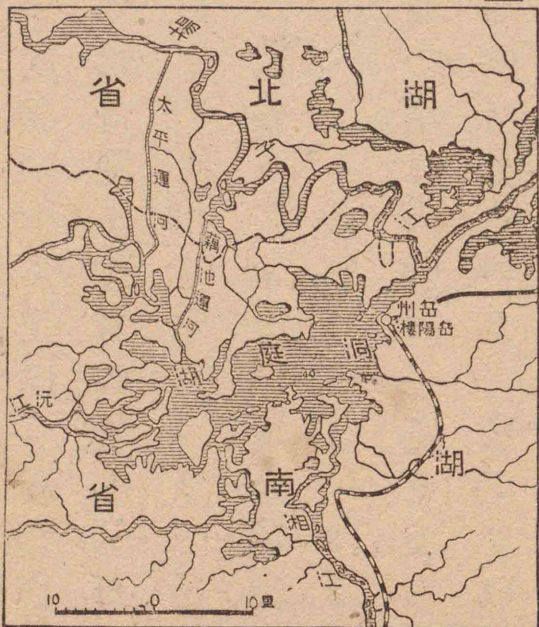
草ひいで木茂り、見渡す限り豊かな田畑の間を過ぎて平林寺に詣でる者は、たゞに春の花や秋の紅葉を賞するばかりでなく、今をほ流れて盡きぬ用水に對して、當年の苦心をしのび、功績のあつた人々に深い感謝を捧

げねばならぬ。

第八課 洞庭湖

洞庭湖は支那湖南省の北部に横たはる大湖で、我が國人にも昔から其の名はよく知られてゐる。さうして有名な岳陽樓の記などによつて、我々は一望千里大洋の如き風光を想像してゐる。なるほど大きいには違ひないが、此の湖は季節の移り變るに隨ひ、水量が著しく増減するので、水面の廣さに非常な變化を生ずる。試みに冬の洞庭湖を見ると、それは一望無邊の干潟とでもいつたらよからうか、其の間を水やせた沅江湘江其の他の諸川が流れて、僅かに往き來の船に路を開い

てゐる。處々に小さい湖程の水たまりはあるが、はてしても知らぬ漫々たる湖水は遂に見ることが出來ない。これでは洞庭湖といふよりは、むしろ洞庭原といった方が適切であるかも知れぬ。ところで嚴冬一度去つて、揚子江水源地方の雪や氷が解け、江水がだんく増して來ると、其の水の一部は湖の北方、太平、藕池等の運河を通じて南に流れ、四月五月頃には、既に湖中諸川の水が兩岸を越えて廣がり、





どうやら一帯が湖らしくなつて来る。更に晩春から初夏にかけて降續く雨に、揚子江はいやが上にもみなぎり、湖南の諸川も亦増水して此の湖に注ぐので、七八月頃には、かの茫々たる洞庭原は洲も川も水たまりも悉く一面の水中に没して、こゝに漫々たる大湖水を現出する。

かういふ風であるから、湖面の廣さは常に一定してゐない。水量が數尺増すと湖の水は數里の外に廣がり、數尺へると十數方里の土地が現れる。増水期中には東西南北ともに二十五里といつてゐるが、勿論大體の數字に過ぎない。増水中でも深さは一般に淺く、諸川の水路

をなしてゐる處だけがやゝ深いので、船はそれをたどつて航行する。若しだんく減水する秋の頃、過つて船を淺瀬に乗上げたたら、それこそ大變である。下さうとしてゐる間に水は一刻々と減じて、船の乗上げた淺瀬は陸地となり、忽ち丘となつてしまふ。船は進退きはまつて、其のまゝ來年の増水期を待たねばならない。かういふ船を冬季水かれて後に見ると、三四十尺の高地に安閑として横たはつてゐる。

洞庭湖は、實に揚子江の水の急激な變化を緩和する一大貯水槽である。江水が一時に増加すると、其の水の一部を此の湖が收め、充滿するに及んで、徐々に元の揚子

江に吐出す。若し此の湖がなかつたら、揚子江沿岸に於て年々起る洪水は更に急激におそつて來て、一層大なる損害を與へるであらう。天然のたくみもこゝに至れば甚だ巧妙といふべきではないか。

## 第九課 契約

約束を守らねばならぬといふことは、我々がとくに教へられ、常に實行してゐるところで、我々の社會共同生活上極めて大切なことである。故に法律では之に關する規定を設けて、其の實行を強制してゐる場合がたくさんにある。殊に約束は普通經濟上の問題に關して結ばれることが多いから、法律は主として此の關係に就

いてくはしい規定をしてゐる。法律では約束のことを契約といひ、それを實行することを履行といひ、契約をする雙方の人々を契約當事者といふ。

契約に就いて其の原則を規定してゐる法律は、民法である。民法では、賣買、貸借、雇傭、請負等諸種の契約を規定してゐる。しかし契約はこれだけに限るわけではないから、民法以外の法律にも、其の他種々の契約が規定されてをり、又法律に規定がなくとも、我々は隨意な内容の契約を結ぶことが出来る。けれども、法律が斯くの如く契約の自由を許すのは、畢竟共同生活の便益の爲であるから、公の秩序、善良の風俗に反するやうな契約は、

効力を認められないのみならず、公益の爲には、契約の自由が制限されることも珍しくない。大正十二年九月の關東大震災後、暴利取締令が出て、たとひ買手があつても、食料品、建築材料、其の他を不當に高く賣つてはならぬと禁止されたのは、其の一例である。

契約には多くの場合、證書が作られるが、證書は結局證據に過ぎないものであるから、證書の有無によつて履行の責任には變りがない。賣買、其の他多くの契約は、當事者雙方が義務を負つてゐるいはゆる雙務契約であるから、契約の各當事者は、自分の方の義務を履行しない中は、相手方の義務の履行を迫ることは出来ない。又

契約を履行するには、其の文言通りにしたといふだけでは不十分である。なるだけ相手方の迷惑にならないやうに、誠實信義の精神を以て履行せねばならぬ。例へば數量の多い貨物を任意な時に引渡すといふ契約をしたにしても、相手方の家に取込のあるのもかまはず持込んだら、それは誠實信義を缺いた行爲である。此の點をよく理解して、互に相手方の利益を斟酌するやうにさへ心掛ければ、契約の締結にも無理がなく、其の履行も圓滑に行はれる。斯くして一つ一つの契約が圓滿に締結履行されること、が積り積れば、やがて社會共同生活の圓滿をもたらす。約束を守るとは大切な道德

上の義務であり、大切な法律上の義務である。

## 第十課 山村

面積三方里といへば廣いやうにも聞えようが、九分通りは山である。其の山あひを縫つて左折し又右曲しながら、南から北へ流れ去る大川に沿うて散在する花澤・石原・根尾・川邊・月野といふ五つの山間部落を一村に合はせて、川邊村と呼ぶ。これが僕の村である。

どちらを向いても五町六町十町とは見渡しのきかぬ山懐に、家といへば、やつと屋根の見えるものまでを數の中に入れても、十軒とは一目に見ることが出来ない。唯一番戸數の多い川邊は、眞直な新道に沿うて家が四

五十軒、いはば此處が一村の中心で、學校もあれば役場もある。豆腐屋・菓子屋・酒屋、さては何でも屋の荒物屋が二三軒、ちよつと町の體裁をしてゐるので、物好きを菓子屋の主人が、入口の障子に筆太に「川邊町」と書いてから、誰言ふとなく「町」といふやうになつたと聞いてゐる。「うぐひすは冬至から鳴くものだ。」とよく祖父はいふが、山里に春はなかく、おとづれて來ない。根尾の正林寺に梅の咲く頃も、尙時々雪が降る。東京から來る子供雜誌の口繪を見ると、元日からたこあげやはねつきをしてゐるが、春の遅い山里の少年少女は、かうした繪をむしろ不思議に思ふ。

春が遅いだけに春がうれしい。谷間々々の雪が消えて、  
麥が日増にのびて行く頃には、土筆つひが出る、れんげ草が  
咲く。日が一日々々と永くなつて、女の子は摘草、男の子  
はたこあげに夢中になる。山の木は松、杉、檜ひのきのときは木、  
其の他は栗、檜なら、楓かへてなどで、櫻はあまりないが、それでも木  
の間がくれに咲く一本二本のゆかしい眺はある。

春も半ばを過ぎる頃から、山村は生氣に満ちて来る。楓  
や檜の若葉が山々にもえ、蛙はおびたゞしく田の面に  
鳴く。田起し、種蒔と次第に忙しくなつて、男も女も馬も  
牛も田畑に出て働く。夏が来て麥の刈入も済むと、やが  
て田植だ。見渡す限り水の一ばいはられた田に、親も子

も手傳の者も、早苗はやなへを手にして一せいに植出す。喉のど自慢  
の音頭に合はせた美しい田植歌が、田から田へと流れ  
る。

此の頃から、朝はよく草刈に出かける。明初める頃、山裾  
のくさむらに、あたりの静かさを破つて、さくく、さく  
さくと切味のよい鎌の音が聞える。と思ふと、露をふく  
んだ草は片端から倒れて、其處にはちまきをした若者  
か、ねえさんかぶりの少女の姿が現れる。一わたり刈取  
つて背負つて行く草の中には、きつと山百合の花の二  
三本がまじつてゐる。

炎天の田の草取はずるぶん苦しいものだ。胸の邊まで

のびた稲の中に分入つて、焼けつくやうな日光を背に浴びながらこぼんで取るのである。風のない土用の眞晝、稻田の中はむつとする草いきれに、體中が汗びつしより、額の汗が兩眼に流れ込んで盲同様になつたところを、いやといふ程稲葉の先で目を突く。湯のやうに熱くなつてゐる泥水に突込んだ足には、何時の間にかたくさんのひるが吸附いてゐる。

田の草取の手傳もそこ／＼に、此の頃の午後はよく川遊をする。青葉がくれの大川筋にさゞめく子供の聲を聞きつけては、もう魂を奪はれて、一もくさんに川端へ走る。大川といつても幅十間に足らぬ山川、水は浅いか

ら泳は出来かねるが、それでも處々に、薄い青みを見せてよどんでゐる小さい淵がある。ざんぶと飛込んでむちやくちやの犬かき、足を立てても水は肩を越すか越さぬくらゐだ。體が冷えて寒くなると、ひなたに背を干しながら淺瀬の一部をせいて、其の中にごりなどを放して興がる。

二百十日も無事に濟んで、稻の花が何時しか重さうな穂になる頃から、農家は又だん／＼忙しくなる。鳴子。かかしが金色の波たつ田の面に立つて、群雀は此處から彼處、彼處から此處へと追ひやられる。早稻から順々に刈取られ、到る處に稻掛が組まれ、やがて農家の内庭に

俵の山が一つ二つとふえて行く。

「今年も豊年だ。氏神様のお祭には、何でも好きなものを買つてやるぞ。」

と父がほゝゑむ。僕たちの心の中には、もうお祭の笛や太鼓の音が鳴り響いてゐる。

秋晴の空に見上げる柿のこずゑの美しさ。てつぺんにさへづるもずの鋭い聲は、狭い山里に響き渡る。山々の紅葉が赤々と夕日にはえて、美しいと思つてゐる中に、朝夕うすら寒くなつて来て、時雨が降出す。せつかく待ちこがれたお祭にも、冷たい雨にちら／＼雪がまじつて降ることが多い。

稲がすつかり刈取られて、水一滴も留めず干上つた田は、僕たちにとつて其のまゝ、広い運動場だ。何處をどうはね廻つても叱られる氣つかひはない。到る處に取残されてある稲掛に登つて、透きとほる程すんだ冬の青空を望みながら、唱歌を歌ふ、器械體操のまねをする。雪が降つて一尺二尺と積れば、藁靴をはいて銀世界の田の面を走り廻る愉快さ。へ「の字」ろ「の字」の跡をつけて、まだ興が盡きねば、雪ころがし、雪だるま、雪合戦。冬の山村は全く子供の天地である。

第十一課 教へ草

仕事を追へ、仕事に追はれるな。

鍬をかたげた乞食は來ない。

朝起千兩。

論に負けても實に勝て。

一の肥しは主人の足跡。

一種二肥三作り。

秋日和半作。

春の一匹秋の萬匹。

田舎に他人なし。

第十二課 動物を愛せよ

ロンドンのハイドパークに遊ぶ。見渡す限り坦々として續く緑の芝生の鮮かさは、目もさめるばかり。馬車や

自動車は河の流のやうにひた押しに續いて走る。目拔の大通から、身一度此の公園にはいると、あたかも都塵を去つて田園にはいつた感がある。さすが入口の附近は、車が走り人が集ひ、名物の露天演説が盛に行はれてゐるが、道に随つて奥に進めば、森あり池あり、喧々囂々けんけんごうごうの響も知らぬ顔に静かな自然が展開してゐる。木陰の椅子に腰を下してしばし休息する。悠々として彼方此方と散策する三々五々の群はあつても、其の足どりは頗る静かである。何事か語り何事かうなづきつつ行く彼等の聲も、殆ど聞えぬ程ひそやかである。うつとりとして此の静かさの中に眺め入つてゐると、



ふと私の靴を軽くつゝくものがある。見ると一羽の雀である。彼は人なつかしげに私の顔をじつと見つめて、物欲しさうな様子をしてゐる。ポケットを探つて見たが、あやにく何物もない。所在なさに、手にしてゐた吸ひさしの巻煙草の灰をぼんと落す。雀は餌と思つたのか、灰を口ばしでつゝいて又見上げる。何といふ人馴れた雀であらう。私は唯身動きもせぬやうにして、此の可憐な動物の心を驚かさぬやうに力めた。雀は失望したのか、やがて飛去つた。私もやをら身を起して、池畔傳ひに隣のケンジントン、ガーデンの方へ向つた。

はてしなく廣く見えたハイド、パークも何時しか盡きて、身はケンジントン、ガーデンにはいつた。小さい島國のイギリスに、どうしてこんな大きい公園が幾つもあるかと思はせられる。ハイド、パークの展開的なのに比べて、此のケンジントン、ガーデンは鬱蒼たる木立が多く、あたかも森林にはいつた感がある。

とある老木の下に、四五人の人が立つてじつとこずゑを眺めてゐる。頑是ない子供たち、其の母親らしい女、それらの顔にひとしく無邪氣な笑みが浮かんでゐる。何事かと私も同じこずゑを仰ぐと、枝上を走る栗鼠が二匹三匹、——やがて枝から幹に傳ひ、地上に下りて人

人の前に来た。母親が袋からパンくづを出して地上に落すと、栗鼠は人も恐れず近づいてそれをたべる。子供も母からもらつて興がりつゝ餌をやる。彼等は此の小さい動物を捕へようとも驚かさうともせぬ。唯栗鼠の好むまゝに活動させて、それを喜んで見てゐた。

デンマークからドイツへ渡る途中のことである。連絡船は今やデンマーク南端の村を離れた。しばらく進行してゐると、後から奇聲を放つて此の船を追つて来る鳥の群がある。見れば我が國でもよく見馴れてゐるかもめである。船は次第に速力を出したが、それでもかもめはとうとう追ひついて、甲板に立つ我等の頭上二三

尺のところを飛んでゐる。手を出せば殆ど捕へられさう。

私の傍に立つてゐた農家の人らしい夫婦が、さつきから何かうなづき合つてゐたが、其の中細君は、袋から辨當のパンを一つ出して、半分を夫に渡した。夫婦は子供のやうに無邪氣になつて、パンをちぎつてはかもめに投げる。鳥は巧に口ばして受取る。受損じて落したのは、他のかもめがすかさず飛んで行つて食ふ。船は進む、鳥も全速力でかける。パンを受取つた鳥がそれを食ふ間に、他の鳥が先に進んで夫婦に近づく。投げる、受取る、後れる、追越す。甲板の人々は、皆にこくしながらしばし

此の光景に見とれてゐた。

ドイツの片田舎の或家に居た時のこと、食事の際にテーブルの上にこぼれたパンくづや菓子のかくづなどを、主婦は丹念に集めて、小鳥にやるのだ。と言ふ。私は、鳥でも飼つてゐるのか。と聞くと、いゝえ。と言つて、窓を開いて窓わくの上になんかそれをのせる。すると庭の樹上に止つてゐた小鳥が、一齊に飛んで来てそれをついばむ。主婦は、小鳥よ、小鳥よ、かはいゝ、小鳥よ。と言ひながら、さも自分の子か何かのやうに、愛の目を以て見つめてゐる。かういふ光景は、殆ど毎日の食事後に眺められた。

「樂しげに歌ふ鳥の、我が呼ぶに飛來る。」——それは多

分詩人の誇張であらうと思つてゐた私は、殆ど西洋到る處の實情であることを知つた。さうして私がこれによつて想ひ出したことは、我が國の動物が、一般に人を恐れ、人に近づかぬことである。人の心はよく動物の心にも反映する。動物が人を恐れるのは、人が之を愛しなからである。勿論農家で牛馬を我が子のやうに取扱つてゐるのはよく見受ける。しかしやゝともすると過重の荷物にあへがせ、口汚く罵る人もある。又神社佛閣に飼養されてゐる鳩や鯉に、參詣者が餌を與へること、も一般に行はれてゐる。が、此の心掛をもつと深くし、もつと廣くして、野外の鳥のやうなものにまでも、濫い心

持て接することが大切ではないか。

## 第十三課 麥秋

六月になつた。麥秋である。青葉の暗い茂みの間々を、みのつた麥が日の出のやうに明るくする。農家では猫の手でも使ひたい時だ。小學校も農繁休をする。子供一人、どうしてなか／＼ばかにはならぬ。初旬には蠶が上るのだ。中旬には大麥、下旬には小麥を刈るのだ。

もう梅雨に入つて、じめ／＼した日が續く。蓑笠で田も植ゑねばならぬ。田植をしまふとさつぱりする。と皆が言ふ。雨間を見ては、刈残りの麥も刈らねばならぬ。刈りおくと、畠の麥が立つたまゝに粒から芽をふく。油

斷を見すまして作物をこのけ顔に増長して來た草も、取らねばならぬ。甘藷の蔓も反さねばならぬ。陸稻やきびひえ大豆の中耕もしなければならぬ。二番茶も摘まねばならぬ。時も時とて飯料の麥をきらしたので、水車に持つて行つて、一晚寝ずの番をして搗いて來ねばならぬ。

空ではまだひばりが根氣よく鳴いてゐる。木立の中では、何時の間にか栗の花が咲いてゐる。田圃の小川では、よしきりが口やかましく終日騒いでゐる。ほとゝぎすが鳴いて行く夜もある。ふくろふが鳴く晩もある。くひながこと／＼たゝくよひもある。ほたるが出る。せみが

鳴く。蛙が鳴く。蚊が出る。ぶゆが出る。はへが眞黒にたかる。のみがはびこる。かなぶん。瓜はへてんたう。蟲、野菜につく。蟲は限もない。どうせ取りきれることではないが、捨てて置けば野菜が全滅になる。取れるだけ取らねばならぬ。

手が足らぬ、手が足らぬ。うちの人數だけではやりきれぬ。はては人を雇うて、一段何程の請負で、田も植ゑさせる。麥も刈らせる。それでもまだやりきれぬ。此の頃は、大病人の外は手をあけてゐるものはない。めくらの婆さんでも、手さぐりて茶ぐらゐは沸かす。ゑんどうやいんげんは畠にすゝなりでも、もいで煮て食ふひまはない。

飯の代りにきびの餅で済ます日もある。近い處は、起きぬけに朝飯前の朝作り、遠い畠へは、お春つ子が、片手に大きなやくわん、片手に茶受の餅か何かを入れたふるしき包を重さうにさげ、小さな體をゆがめて持つて行く。

此の季節に農家を訪へば、大抵は戸口がしめてある。猫一匹ゐない家もある。何を聞いても、くるくゝとした目を見はつて、知らないよ。」と答へる五つ六つの女の子が、赤ん坊と唯二人留守してゐる家もある。徳富健次郎、みゝすのたはこと、據ル

## 第十四課 海の朝

一  
潮の音遠し、明行く海。

なほ夜の名残に、さ霧はこめて、

はひよる浦波砂を洗ふ。

船歌かすか、夢に似たり。

二

紫にほふ東の空。

横雲忽ち眞紅に燃えて、

見るく、太陽波を離る。

神代のまゝの光たふと。

三

金龍をどり、きらめく沖。

早くも島々夢よりさめて、

群立つかもめは風に白し。

命は溢る、海の朝。

第十五課 我が國の水産業

我が國は其の地形が東北から西南へ長く延び、北端は寒帯を去ること甚だ遠からず、南端は其の幾分が既に熱帯にはいつてゐる。しかも四面の海洋には、寒暖兩流が流れ來つて多量の浮游生物をもたらし、又多數の河川が絶えず淡水を注いで海水の鹹味を適度にし、浮游生物の繁殖を助けてゐる。かういふ關係から、我が國の

近海には魚介の生活に必要な天然の餌料が豊富であり、随つて水産生物が非常に多く生存してゐるのみならず、一方には寒・温・熱三帯の生物を殆ど網羅してゐるから、其の種類の多いことに於ては實に世界に冠絶してゐる。寒海に棲むたらゝの如き底魚も、暖海を游泳するかつをまぐろの如き廻游魚も、併せて漁獲し得るのは實に我が國水産業の一大特色といつてよい。彼のイギリスやノルウェーの如き著名な水産國ですら、尙其の國に於て獲る所は主としてしんたらひらめ等の種類に過ぎないために、是等を輸出して南歐のいわしまぐろ等を輸入し、又イタリヤ・イスパニヤの如きは、いわしまぐろを輸出して多量のたらを輸入してゐるのである。

海洋をめぐらし、水産物の豊富な我が國では、古來水産業が盛に行はれ、現在も漁業者の多いこと、漁船の多いこと、又漁獲高の多いこと、何れも世界第一である。大正十四年の調査によると、我が國の漁業者約百一十一萬七千人、漁船約三十五萬七千艘、漁獲高約三億八千萬圓であつて、何れもはるかに諸外國を凌いでゐる。唯こゝに考慮すべきは、漁業者の數に比して漁獲高が多くないことである。イギリスに於ける漁業者一人が一箇年に漁獲する高は、平均二千數百圓に及び、フランス・英領カ

ナダ等、何れも一千圓の上に出てゐるのに對し、我が國では約三百四十圓に過ぎない。これ畢竟、我が漁業者の多くが今日尙古來の傳統的方法を墨守してゐるのに反し、彼は學理を應用し、大規模の漁業に従事してよく其の能率を上げるからである。我が國の漁船は、其の數に於てこそ世界第一であるが、主として沿岸漁業を營む小形のものであつて、遠洋漁業に従事し得る大形の船は、まだ餘り多いといふことが出來ぬ。

遠洋漁業の發達に連れて、規模はいよゝゝ大きくなり、漁業の區域は益、廣がつて行く。フランスの如きは、盛にニューファンドランド・アイスランド及び北海に漁船隊を

送つて遠洋漁業を營んでゐる結果、彼の本國の近海に於ては產出しないたらが、常に其の國の水産物中の第一位に上つてゐる。我が國でも、汽船トロール漁業や發動機船漁業の勃興により、支那、露領、南洋等の沿海まで漁業區域を廣め、最近では遠く南氷洋にまで進出するに至つたが、遠洋漁業はまだ十分に發達したといふことは出來ない。我が水産業が將來いよゝゝ多望であると共に、漁業者の奮起努力を要するは言をまたぬ。

## 第十六課 フェルデナンド、マゼラン

今から四百年ばかり前、ヨーロッパ諸國には航海熱が盛になつて、新航路の發見や新陸地の探檢を試みる者が



多かつた。ポルトガルの人フェルヂナンド、マゼランも其の一人で、世界周航の最初の偉業は實に彼によつて企てられたのであつた。

マゼランの生まれた年は詳でないが、西曆千四百八十年頃といはれてゐる。大膽で進取の氣性に富んでゐた彼は、時代の機運に動かされて、航海には深い趣味を持つてゐた。さうして若い頃から遠く印度やマレー半島の附近に航して、幾多の辛酸をなめ、實地の經驗を積んだので、航海に對する自信は非常に強かつた。

マゼランはかねて大西洋を西へ進んで、南洋のモルッカ諸島に出る航路を發見したいと望んでゐた。しかしポ

ルトガルに於ては此の希望を實現することが出來なかつたので、隣國イスパニヤへ行き、時の王チャールス五世を説いて、遂に其の贊助を得た。

そこで彼は先づ大小五隻の船を用意した。次に乗組員の募集を始めたが、かういふ命がけの大冒険（冒険）に参加しようとする者は殆どない。いろ／＼骨を折つた結果、イスパニヤ・ポルトガル兩國人を主として、二百三十餘名の乗組員をやうやく集めることが出來た。

總べての用意を整へていよいよ大航海の途に上つたのは、コロンブスの新大陸發見後二十七年の千五百十九年九月二十日であつた。一行はカナリヤ諸島を經し

ばらくアフリカの西岸に沿うて南下し、それから方向を南西に轉じて、大西洋横斷にかゝつた。洋々たる希望に胸ををどらせながら、前途の幸福を祈つてゐたマゼランの前に、そろ／＼不幸が頭を持上げて來た。當時航海に従事した船員には、一體に兇暴無頼の徒が多かつたが、殊に此の時は數國の人々を集めたために、やゝもすると互に反感をいただき、不和を生じ易かつた。船は皆百トン前後のものである。しかも大西洋には荒狂ふ風、逆巻く波があり、身を切るやうな寒さがあつた。是等の強敵と戦ふ乗組員は、疲れるに連れてけんくわは始める、不平はいふ、船内の秩序は日數の重るに隨つてだん

だん亂れて來た。或船長の如きは、まのあたりマゼランを非難するに至つた。マゼランは見せしめのため、斷乎として其の不都合を責めて、船室に幽閉した。此の勢に恐れてか、不平の徒は聲をひそめて、大事には至らなかつた。

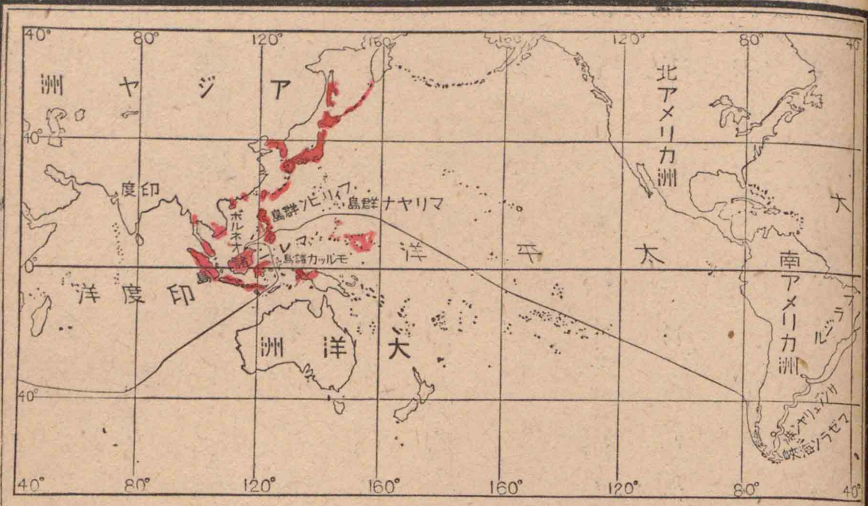
一行は風波と戦ひつゝも遂に大西洋を乗切つて、ブラジルの東岸に着いた。それから南下して、翌年三月にサン、ジュリアン港にはいつたが、ちやうど南半球の冬が近づいたから、其處で冬を過すことにした。此の港の附近は荒涼たる不毛の地であつたから、食料を得る便宜がなかつた。そこでマゼランは乗組員の日々の食物に制

限を加へた。これがために積り積つた部下の不平は遂に爆發した。

各船内には不穩の氣がみなぎつて、マゼランの身に危険が迫つた。若し此の上航海を續けたら、部下のために殺されるかも知れない。しかし剛毅なマゼランは、これくらゐのこととて意志をまげるとはなかつた。彼は各船長と協議して、事を穩便にをさめようとしたが、かへつて三人までも彼に對して反旗をひるがへした。マゼ



ランは尋常の手段では事がをさまらないと見て、二船長を死刑に處し、一船長を陸上に追放して、秩



序の回復を計り、同年八月再び出發した。  
南へくと進む中、十月二十一日はからずも一の海峡にはいつた。白雪をいたゞいた山々を兩岸に望みながら進むこと三十八日、海峡は急に開けて、前面に見渡す限りはてしなき大洋が現れた。途中一隻の船は難破し、一隻は謀反を起して本國へ引返したが、マゼランはそれ等の不幸も打忘れて、飛

立つばかりに喜んだ。此の海峡はマゼランの名譽を永く傳へるために、後の人がマゼラン海峡と名づけた。永く風波に苦しめられた後、一度海峡を出ると、波は靜かに、風は和らいて、如何にも平和の氣に満ちてゐた。マゼランは此の大洋を横斷する間波風に苦しめられることがなかつたので、平和な海といふ意味で、太平洋と名づけた。

太平洋航行中一行を非常に苦しめたものは、食料の缺乏であつた。貯へた食料はだんくへる、進んでもく陸は見えない。甲板の一部を張つた牛の皮、船倉のねずみ、食へさうなものは何でも食ふといふ悲惨な有様で、弱り果ててたふれる者が多かつた。

全く陸を見ないこと九十八日、千五百二十一年三月六日、一行はやうやく一群島を發見した。其處に碇泊してゐる中、土人にボートや船具を盗まれたので、マゼランは此處をどろぼり群島と名づけた。これが今我が國の委任統治に歸してゐるマリヤナ群島である。

それから尙も西航して、程なく今のフィリピン群島に着いた。此處では食料も十分に得られたので、疲れきつた一行は、久しぶりにゆつくり保養することが出來た。マゼランはフィリピン群島の征服に取りかゝつたが、餘りに功を急ぎ、自分の力を頼み過ぎたために、多くの部

下を失ひ、自分も遂に土人のために殺された。それは千五百二十一年の四月二十七日のことであつた。一行はボルネオを経て、かねてマゼランが目ざしてゐたモルッカ諸島に出た。使用にたへる船は唯一隻となつたので、残つた乗組員をこれに集め、セバスタン、デルカノーが指揮して本國へ向つた。印度洋を横ぎり、喜望峯を廻つて、長いく、航海を續ける間にも、病氣でたふれる者が少くなかつた。かうして千五百二十二年九月六日、世界周航の最初の名譽を負うて故國に歸つたのは、僅か十八人に過ぎなかつた。地球の圓いといふことの證明せられたのも、此の航海の賜である。

## 第十七課 征衣上途

動員令のあつた其の日から殆ど一箇月、即ち明治三十七年五月二十一日、これぞ一生忘れることの出來ないうれしい日であつた。いよく、戦地へ行かれることになつてみると、半時も早く出發したいと、誰一人思はない者はなかつた。さて其の待ちに待つた出發の日は決定されて、午前六時城内練兵場に整列せよとの命令が下つた。日頃の熱望こゝに達して、男兒の本懐之に過ぎるものはない。我等の歡喜は無限であつたが、此の歡喜と共に、又暗涙の浮かぶのを禁じ得なかつた。丈夫涙なきにあ

らず、離別の間にそゝがず。とか。無論今更家を顧み親を慕ふのではないが、生きて再び歸らぬ決心があればある程、これが親子兄弟今生の見をさめかど、鬼の目にも涙のたとへは免れ得なかつた。

出發の前夜、舊友の寫眞を出して見たり、机の中を片附けたり、死んだ後で留守の者に何一つわからぬ事のないやうに、それ〴〵整頓したりしてから、疊の上での最後の眠を求めようと寢床に就いた。

しばしまどろむと思ふ間もなく、柱時計は午前三時を報じた。すはとはね起き、冷水で身を清め、晴の征衣を着飾つて、宣戰の大詔を奉讀し、はるかに大君います東の空を伏拜んだ。次に之を最後と、祖先の靈前に禮拜したが、此の時は、汝は汝にして汝にあらず。陛下の御爲進んで難に赴け。未練なるふるまひして家名をけがすな。と戒められるやうな感じがした。さて家族一同自分を圍んで別杯べいを舉げて、皆此のめでたい出陣を祝つてくれた。

「後の事は少しも心配するに及ばぬ。思ふ存分に働け。あつばれな功名をして、家門の花を咲かせてくれ。私の事は決して御心配下さるな。武士の譽としてこなうれしい事はございませぬ。せつかくお體を大切に。」とは、ただに自分の家のみでなく、今日出征する人の殆ど總べ

ての家々で、親子の繰返した悲壯の語であつたであらう。時は迫つた。自分は神前に供へておいた軍刀を腰に着け、勇みに勇んで我が家の門を後にした。

午前六時、聯隊は整列を終へ、軍旗は莊重な「あしびき」の曲の吹奏に迎へられて、朝風にひるがへつてゐる。聯隊長は沈痛な音調を以て、故國を去るに臨んでの最後の訓示を朗讀した。終ると其の發聲で、一同大元帥陛下の萬歳を三唱した。

「第一大隊より前進」これ進軍に臨んで聯隊長が部下に下した最初の號令であつた。我等は既に征途に上つたのである。一同血湧き肉をどるの思があつた。向ふ處は天も裂くべし、地も碎くべし。

長蛇の如き我が聯隊は、誠心誠意よりほどばしり出でたる國民の萬歳の聲に送られて、勇ましく前進した。次第に遠ざかる靴の音蹄の響は、如何ばかり國民の耳に頼もしく聞えたことであらう。遠く近く響き渡るラッパの音は、即ち親愛なる同胞に對する暇乞であつた。老も若きも手にく、國旗を振りかざし、天地もとゞろくばかりに叫ぶ萬歳の聲を聞いては、我等は誓つて此の至誠に報いなければならぬとの感慨を深くした。其の後度々の戦闘に、喊聲を揚げて敵壘に突撃する毎

に、背後で國民の萬歳の聲が潮の如くに湧起るやうに感じた。我等の喊聲は國民の萬歳の聲の反響に外ならぬのである。巨彈耳をかすめる戦場の朝にも、嚴寒骨をさす露營の夕にも、決して忘れることの出来なかつたのは、國民が熱血をしぼつて叫んだ萬歳の聲であつた。

(櫻井忠温「肉弾」ニ據ル)

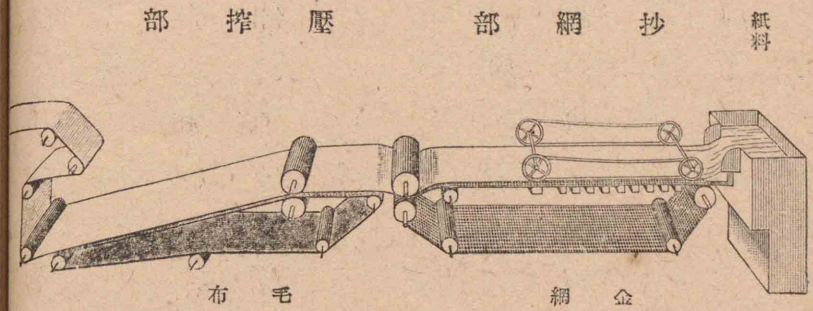
第十八課 西洋紙の製造

西洋紙を製造するには、藁ぼろ紙くづ等も原料として用ひられるが、主として使用されるのは木材である。現今我が國では、えぞ松と、松等の松材が用ひられる。木材を材料として紙を造るには、先づ木材を機械にか

けて、方六七分ぐらゐの薄片にする。之を圓筒形の大きな釜に入れて、藥液を混じ、釜の中に蒸氣を通じて熱すると、木材の組織が破壊されて、纖維が分離する。そこで他の不要な部分を捨て、纖維だけを取り出して他の機械にかけ、洗つたりさらしたりすると、白色のどろろとした糊のやうなものとなる。此の紙料を抄紙機にかければ、紙が出来るのである。

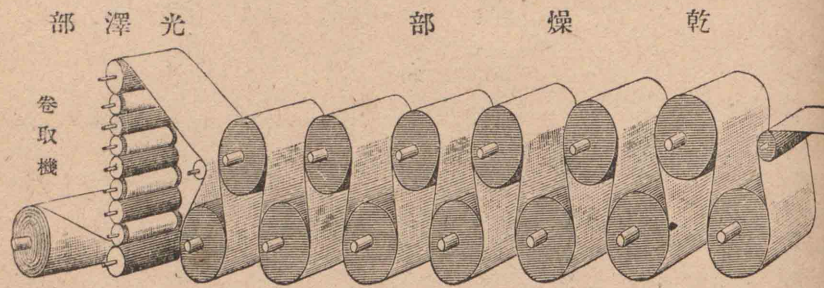
此の外に、木材を大きな砥石にかけて磨りつぶし、之に水を混じて其のまま、抄紙機にかける方法もあるが、是は主として新聞の紙など粗悪なものを製造する方法である。





抄紙機

抄紙機は幅八九尺、長さ十數間にわたる大きな機械で、抄網部、壓搾部、乾燥部、光澤部の四部から成つてゐる。其の中で抄網部は紙を抄く仕事をすする所で、普通に紙を抄く時に用ひる竹の簧の代りに、真鍮の細かい網が帯のやうに張られてゐる。此の金網は少しづつゆれながら、絶えず一方から一方へと動いて行く。紙料が此の金網の上に流れ出ると、水は網目から落ちて大體紙が出来、金網の



の圖

進行に伴なつて壓搾部に送られる。壓搾部はまだべとくした抄きたての紙を毛布の上に受けて運びながら、ロールで壓搾し、更に水分を除去する所である。次の乾燥部には、蒸氣で熱せられた幾多の圓筒が横に並んでゐて、紙が其の圓筒の面に沿うて順次に進みゆく間に乾かされる。光澤部はロールの壓搾によつて、之に光澤を附ける所である。かうして金網の上に流れ出る糊の

やうな紙料が見る／＼中に完全な紙となり、卷取機に  
巻かれてゆく其の早さは、實に目を驚かすばかりで、一  
分間に抄出される紙の長さには、實に三百尺から千二百  
尺に及ぶのである。

現時我が國にある此の種の抄紙機は、五百六十臺の上  
にもものぼつてをる。これが夜となく晝となく働いて抄  
出す紙の量は、實に莫大なものである。

第十九課 植附前後の様子を報ず

拜啓先般は御手紙を頂き有難く拜見致候御  
一家いよく御健勝の由御喜び申上候降つ  
て私方一同無事に暮し居候間御安心なし下

されたく候仰の如く本年は梅雨期に入りて  
もとかく晴天うち續き候ひしが御地方は水  
利も宜しくさほどの御不自由もなく御過  
しなされ候由誠にうらやましく存候當地は  
御承知の通り至つて灌漑の便に乏しきため  
既に先月半ば頃には苗代水さへ殆どこれな  
く全く途方に暮れ申候随つて植附も一日延  
しに延し居候ひしが村民相勵まし農會の盡  
力により揚水機を借受けかれ／＼になりた  
る小川に之をすゑつけ辛うじて十日許前に  
植附を終へ申候其の後ひたすら空を仰いで

雨を待ち候處二十九日の夕刻より豪雨襲來  
農家の歡喜其の極に達し候以來毎日降續き  
始めて梅雨らしく相成り苗も際立ちて活氣  
づき申候一方ならず御氣遣に預り候へども  
右の次第に付何卒御安心の程願上候草々

年 月 日

田中善作

堀江連太郎様

第二十課 害蟲と其の敵

稻の害蟲として最も大きな損害を與へるものはずの  
蟲である。正確な數字によつて其の損害高を計算する  
ことはむづかしいが、我が國內地一箇年の米産額を六

千六百萬石とし、此の蟲の被害をうちばに見積つて其  
の百分の五とすれば、三百三十萬石に上り、一石三十圓  
としても實に九千九百萬圓の損害となる。

此のずる蟲には、つばめ、蛙、くも等いろくの敵がある  
が、最も有力な敵はずる蟲赤卵蜂である。これは年に十  
五六回も發生して、ずる蟲の卵の中に寄生する。或處で  
の調査によると、此の寄生蜂がずる蟲の卵に寄生する  
歩合は、六月上旬には三パーセント内外であるが、七月  
になると八十パーセント内外に及ぶさうである。さう  
して此の寄生蜂は殆ど全國に分布してゐて、ずる蟲を  
其の卵の時代にたふすから、ずる蟲の繁殖を妨げるこ

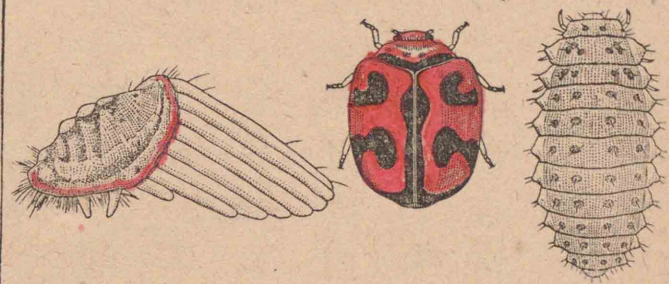
とが頗る大である。

うんかは年により非常に多く發生して、稲作に慘害を及す害蟲である。近年に於て其の害の最も甚だしかつた明治三十年には、被害の面積約二百八十萬町歩に及び、減收約六百萬石、七千五百萬圓の損失であつたといはれてゐる。

此のうんかにも亦敵がある。蛙くもとんぼ等が之を捕食する外に、寄生蜂や寄生菌があつて、うんかをたふし、其の害を少くしてくれるのである。

此のやうに、ずる蟲にしてもうんかにしても、それとく敵があつて、自然に害蟲驅除の助をしてゐるのであるが、害蟲の敵の中には、特に之を利用して十分に驅除の目的を達することの出来るものがある。イセリヤかひがら蟲に對する強敵ベダリヤてんたう蟲は、けだし其の適例であらう。

イセリヤかひがら蟲は主として柑橘類につく害蟲で、もとオーストラリヤの産であるが、近年我が國にも現れ、今では國內主要の柑橘類の栽培地には、殆ど其の發生を見ない處がない程になつた。雄は長さ三ミリメートルぐらゐ、雌は三乃至七ミリメートルであるが、雌が老熟すると、尾端に白色の卵囊たまごが出来、其の中に産卵し始める。此の卵囊は、産卵數の増加と共にだんく、大き



蟲らがひかヤリセイ 雌

蟲うたんでヤリダベ 成 幼

ミリメートルぐらゐの蟲で、やはりオーストラリヤの原産である。數十年前アメリカ合衆國で、原産地から之

くなる。さうして卵から孵化した幼蟲は、此の卵囊から出て適當な場所に移り、其處に止つて樹液を吸収し、木の發育及び結實を妨げる。其の上、此の蟲の分泌する甘い液には、一種の菌が寄生して更に被害を大ならしめ、しばく木を枯死せしめる。此のイセリヤかひがら蟲の強敵たるベダリヤてんたう蟲は、長さ四五

を輸入し、試みにイセリヤかひがら蟲の驅除に用ひたところ、其の効果は頗る顯著であつた。以來世の注意を引き、廣く各國で利用するやうになつた。此の蟲の雌は、イセリヤかひがら蟲の卵囊や其の腹の側面などに産卵する。さて此の卵から孵化したベダリヤてんたう蟲の幼蟲は、イセリヤかひがら蟲の卵囊に食入つて、其の中の卵



や孵化したばかりの幼蟲を食ひ、又は其の親のイセリヤかひがら蟲の皮膚を破り、内臓を食つて之を殺してしまふ。しかも此のベダリヤてんたう蟲は、頗る貪食であつて、幼蟲のみならず成蟲も盛に相手のイセリヤかひがら蟲を食ひ、殆ど之を全滅させねば止まぬ。唯困つたことには、此の蟲がイセリヤかひがら蟲を大抵食盡くして食物に窮するやうになると、次にはとも食を始めて、ために自分等の種族も全滅するに至るから、再びイセリヤかひがら蟲が発生した場合には、更にベダリヤてんたう蟲をはなして其の驅除を圖らねばならぬ。

第二十一課 夏の田園

午前

片岡に日輝き、

山田の稻葉は光り、

道の粉砂は焼けて、

吹く風に舞上る、

諸聲に鳴くせみ、

今日も暑さう。

草いきれ

右も青田、

左も青田、

中の小道を、

あふごかたげて  
行く我が顔に、  
草いきれ。

眞夏の眞晝

畠打つ鋤の先、  
日の光照返し、  
きら／＼ときらめくを、  
桑畑越しに見る  
眞夏の眞晝。

午後の二時

午後の二時、草葉はしをれ、

牛眠り、鶏いこふ。

鳴くせみのはたとやむ時、

自轉車のタイヤの音は  
道をよぎりぬ。

水車

谷川のせゝらぎに  
かゝりたる水車、  
車輪に水碎け、  
水晶のしづくは  
中空より滴る。  
車の朽木の香は

涼しき風さそひて、  
しみづくにほふ。

夕暮

村の灯は二つ三つ。  
牛追ひて行く方は  
落日の名残して、  
ほの明き大空、  
涼しげに夕星一つ。  
物皆はよみがへる  
夏の夕暮。

第二十二課 船津傳次平

船津傳次平は、天保三年十月一日、上野國勢多郡富士見村に生まる。年少の時より農事に従ひ、日々力耕を怠らず。農閑には父に就きて和漢の學を修め、且數里の遠きに在る算道の師に通ひて、頗る其の道に通じたり。彼は學問と實地とを分たず。學びし所の知識を悉く農事に應用し、土壤の性質、肥料の配合、種子の選擇、播種の方法等に就いて熱心に研究を進めたり。選ばれて名主となるや、先づ赤城山の南麓四百餘町の地に松を植ゑて、水源の涵養に資せり。明治初年、三十六箇村の大總代に任ぜらる。當時此の地方の農家、一般に養蠶を以て専ら婦女子の業となし、之



を輕んずるの風あるを憂へ、男子も亦力を盡くして之に従ふべきを説きて、大いに斯業を發達せしむ。又農閑毎に青年を集めて修養をすゝめ、讀書・算術・習字・農學を教授せり。彼元來歌文の才あり。時々養蠶・稻作或は里芋・甘藷の培養法等を俗謡體につゞり、自費にて刊行し、之を各地に配付せり。

時に内務卿大久保利通は、産業の發達に力を注ぎ、農業の方面にては農事試験場を設け、農學校を建てしが、農學の師に理を知つて實を知らざる者多きを遺憾とし、經驗を積み斯道の師表たるべき人物を天下に求めたり。たましく傳次平の事を聞き、群馬縣に出張して彼と

會談し、直ちに其の非凡なるを認め、東京の西郊、駒場の農學校に於て實習を指導せんことを勸む。彼容易に動かざりしが、終に利通の知遇に感激して之を諾せり。當時駒場の地たる、茫々たる荒原なりければ、彼此處に農場を開くに當りて一隅に假小屋を建て、晝は鉢巻ももひき姿にて人夫等と共に開墾に力め、夜はランプのもとにて農事の調査研究にいそしめり。

一日利通駒場に來り、彼の竹木を切り、亂草を刈り、根を掘り、土を返す等、人夫にまじりて勞働せる姿を見て打驚き、それにては調査の時間あるまじと言ひしに、彼農事の調査は夜間にて十分なりと答ふ。利通、假小屋中の

夜業定めてさびしかるべしと言へば、笑ひて、さびしき中に限なき趣ありとて、

## 駒場野や開き残りにくつわ蟲

といふ句を示せり。

かくて駒場に勤むること八年、其の間實習の指導のみならず、農學の講義をもなし、時々外國人の教師某と見解を異にすることありしが、實驗の結果は必ず彼の言あたれりといふ。

傳次平かつて赤城山に草刈してありし折、ふと一株のかやの際立ちてのびたる様を見て不思議に思ひ、かやの根元に近寄り見れば、其の傍にやゝ大いなる石あり。

此の石日光に温められて芽の發育を促すことに氣附き、歸りて己が畑の作物の根元に一々石を立てて試みたり。其の實驗に熱心なるかくの如し。

彼後に農商務省に入り、更に農事試驗場に轉じ、技師に任ぜられ、藍綬褒章を賜はれり。晩年郷に歸り、尙農事に盡くしたりしが、明治三十一年六月十五日病歿せり。年六十七。著に「稻作小言」「里芋栽培法」「菘栽培法及び効用」等あり。

東京府飛鳥山の櫻樹立ち並ぶ處、彼の傳を刻したる丈餘の碑あり。其の篆額は大日本農會會頭小松宮彰仁親王の御染筆にかゝり、文章は子爵品川彌二郎の撰なり。

第二十三課 漁船歸る

焼けつくやうな夕日は、さへぎるものもない白い砂を眞赤に染めてゐる。風のないだ海の波は、小山のやうに寄せて來ては、だぶりとけだるい音に崩れると、ざざざざ、ざと布を敷いたやうに廣がる。と、其の波先がきらりと日に輝いては、すぐさつと引いて行く。

「船がはいるよう。」

人影一つない廣い濱の何處からか、急にかん高い子供の聲が起る。

「おうい。」

「今行くよう。」

あつちでもこつちでも聲に應じて、其處の松の間、此處の岩の陰から、男、女、年寄、子供、漁村の人の群がぞろぞろと出て來る。今まで眠つたやうに靜かであつた濱は、急ににぎやかになり、活動が始つて來る。高い砂山の上に立つて小手をかざしながら沖を見てゐた一人が、

「眞先が明神下の船だ。」

と大きな聲で叫ぶと、

「うん、うちの船か。」

と、其の家族らしい四五人が勢よく砂山にかけ上る。朱を流したやうに夕焼に染まつた沖の方からは、黒い帆影がぼつたり小さく、一つ二つと歸つて來る。

「あゝ、また見えた。今度は太兵衛どんのうちのだ。」  
と誰かがまた叫ぶ。

湧くく。沖の波の間から、小さい船が一つ又一つ、後から後から視界にはいつて来る。濱に立つてゐる人々は、皆言合はせたやうに我が家の船を見守る。子供たちはもうはしやぎきつて、緩く打ちつける波先を追つては逃げ、逃げてはまた追ふ。

船は幾艘も續いて、ないだ海に夕日を受けた帆が美しく並ぶ。かもめが三四羽、其の先導をするやうに低く飛んで岸近く来ると、一齊に水の上につばさを休める。  
「大れふだぞ。あの帆柱を見る。」

群集の中の誰かが叫ぶ。次第に近寄つて来る船の帆綱には、幾つもの編笠が飾のやうにつるされてゐる。一つ百尾の目安として、どの船にも五つ六つないのはない。櫓を漕ぐ掛聲がかすかに波を渡つて来る。

濱には益、人数が増して、右往左往に入亂れる。籠かごを持つてゐるもの、棒をかついでゐるもの、飛廻る子供、それを追ふ犬、うれしさに張切つた空氣があたりにみなぎる。やつさ、ほいさ、やつさ、ほいさ、十挺とん櫓の勇ましい掛聲は次第に近づいて、高波を乗越えく、見る間に一艘二艘と寄つて来る。岸から三四十間の處まで来たと思ふと、ぐるりと船が廻る。仁王のやうにたくましい姿が艦かべに

現れて、

「綱を投げるぞ。」

と大きな聲で叫ぶ。聲と共に太い綱が勢よく陸の方へ投げられる。船からも陸からも、若い男たちが赤銅のやうな體を海中にをどらせて、水にたゞようてゐる綱を陸にかつぎ上げる。えつさ、えつさ、えつさ、船を押す。綱を引く、拍子ひたしを合はせて一直線に陸に向ふ。船は舳先を波にゆられながら、高い艦を小山のやうに陸に向けてすわる。

船からは勇ましい掛聲と共に、次から次と獲物が運ばれて、白い砂の上に投出される。瑠璃るりのやうにすんだ目、紫をふくんだ青色の背、勢よく張つた尾鰭びれ、見る／＼く 鯉こいの山が築かれる。此の時、此の華やかな夕日の下に、多大の勞苦に報いられた海幸うみさきを圍んで起る喜の聲は、波を渡り山にこだまして、遠く／＼何處までも響いて行く。

第二十四課 廣瀬武夫の手紙

毎度御懇書拜受再三精讀仕居候先づ以て姉上様にも馨けいちやんにも相變らず御壯健大賀の外これなく候降つて武夫たけお儀例の通り壯健日夜軍務に従事致居候間は、かりながら御休神なし下さるべく候毎回の御手紙實に御友愛の情溢るゝばかりにて誠に感激に堪へ

ず候御惠贈の書籍吳羊羹耳袋並に靴足袋確  
に拜受御厚情に報いん言葉もこれなく候  
先日大島艦入港し即夜兄上御來訪出征後始  
めての兄弟の面會とて覺えず嬉し涙に暮れ  
申候兄上には昨今頗る御壯健にてもはや御  
病後の御様子などは更にこれなく候間御安  
心遊ばさるべく候

報國丸にての働につきては兄上にも非常に  
御喜びなされ早速御手紙を以て武勇絶倫先  
考に代り之を激賞すとの御言葉をいたゞき  
武夫の満足も之に過ぎず候安井様よりも御  
手紙をいたゞき申候又新聞紙上には有るこ  
と無きこと書立て鬼などのあだ名を附し候  
もをかしく又報國丸にて働きし真相などと  
て武夫より親しく聞きしやうに書き候もの  
もこれあり候へども實は誤多く迷惑に感じ  
候點もこれあり候  
負傷者に御見舞として餅との御意見はさる  
ことながら彼等には焼くなどの自由これな  
く候間御見合はせ下されたく若し思召もこ  
れあり候はば武夫姉として御見舞狀を御出  
し下され候はば幸甚の至に候

武夫儀はいよく相勵み軍功を立て申すべく、七度人間に生まれて國賊を滅さんとは一貫の精神にこれあり決して先度ぐらゐの働にて満足致す者にこれなく候元來天佑を確信し居ることに候へば決してく無用の御心配下さるまじく候再拜

三月二十日

武夫

姉上様

運送船の便よろしく何の不自由をも感じ申さず候間種々の御心づかひは御無用に遊ばされたく候時下御自愛を祈上

候

第二十五課 スパルタ武士

昔ギリシヤにスパルタといふ國ありき。國民愛國の精神燃ゆるが如く、武勇の譽今尙高し。而してスパルタ人の教育の方法と生活の状態とを聞くものは、此の聲譽の偶然にあらざるを知るべし。

スパルタ人は悉く武士にして、男子生まれて七歳に達すれば、國立の教育所に收容せられ、王子王族といへども家庭に人と成るを許されず。其の教育は身體の鍊磨と士氣の養成とを主とし、日常の學課は體操・武術・劍舞・軍樂等にして、讀み書きの如きは餘力を以て之を學ぶ





二十歳に達すれば、始めて共同の教育所を出でて、公民の列に入る。しかも武藝の練習は終生之を怠るを得ず。公式祭儀の席には、老若相合して武勇の歌をうたふ。老人先づ聲を上げて、「我等はかつて武勇なる壯者なりき。」とうたへば、壯年之に次ぎて、「我等こそ今はそれなれ。知らぬ者はいざ試みよ。」とうたふ。少年また之に和して、「我等はやがて更に武勇なる壯者たるべし。」と結ぶ。斯くの如き尙武教育に鍛はれたるスバルタ武士は、死を見ること歸するが如く、瓦となりて全からんよりも、玉となりて碎けんことを希ひ、祖國の爲に一命を捨つるを以て無上の名譽とせり。

こゝにスバルタ武士の面目の一端を見るに足るべき二三の美談を記さん。

敵の軍勢山野に満ち、大小の軍旗空をおほひて天日見えずとの報に接し、大將自若として曰く、「然らば其の陰に戦はん。」

敵勢雲霞の如く、其の數を知らずと言へば、一將喜んで曰く、「敵勢大なれば、我等の名譽も亦随つて大なり。」一將又曰く、「我等は敵軍の數を知るの要なし。唯其の所在を知るべきのみ。」

敵軍將に寄せ來らんとすと報ずるものあり。將軍叱して曰く、「敵、我に寄するに非ず、我、敵に寄するなり。」

スパルタ人の忠勇義烈なるは、獨り男子のみに非ず、女子も亦此の氣性を分てり。一婦人其の子の出陣に際し、自ら盾を取りて之に授けて曰く、「勝ちて持歸れ。然らずんば之に乗りて歸れ。」

或時の戰に、一時に五子を失ひたる母あり。人あり、來りて之を告ぐれば、先づ勝敗の如何を問ふ。我が軍勝てりと聞きて、喜んで曰く、「我が子は祖國の爲に之を産めり。」又或時の戰に、討死したる勇士の母は、花冠を被りて街頭に集り、互に其の子の名譽を祝し、敵の包圍におちいりたる將卒の母は、固く戸を閉ぢて出でず、ひそかに其の子の武運つたなくして、祖國の爲に死する能はざるを悲しめり。

## 第二十六課 統計

一家に就きて見るときは、男女の數甚だしく異なるものあり。或は全く男子又は女子のみの家なきにあらず。然るに一村に就きて調査するときは、一家に於けるが如く男女の割合に甚だしき差異なし。なほ其の區域を廣むるときは、一郡は一村より、一縣は一郡より、差異次第に減少し、斯くて全國に就きて見れば、更に僅少となる。例へば昭和十年十月一日施行せられたる第四回國勢調査の結果によれば、我が國內地の總人口は六千九百二十五萬餘、中男子三千四百七十三萬餘、女子三千四

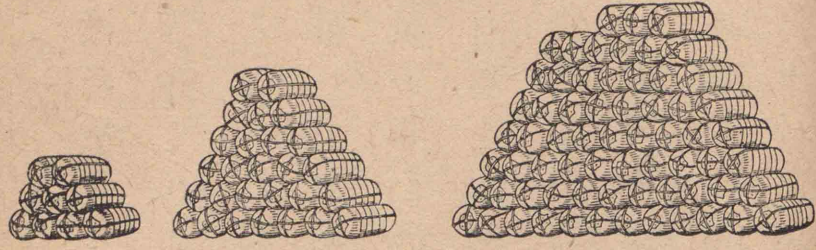
百五十二萬にして、男子百人に對して女子九十九人四分に當る。

男女の割合斯くの如くなるは、此の時の調査のみに限らず、從來の人口統計に就きて見るも、常に相似たる結果を示し、其の割合は略一定せり。又年々の出生・死亡・婚姻・自殺等も、大數に就きて觀察するとき、は、それ〴〵其の人口に對する割合は殆ど一定し、郵便物の配達不能の割合すら、年々相似たりといふ。されば社會の現象は一見甚だ不規則なるが如しといへども、大數に就きて之を觀察するとき、は、自ら整然たるものあり。斯く同一種類に屬する事物又は現象の大數に就きて

年次	人口百ニ ツキ出生	出生女百 ニツキ男	出生百 中死産	人口百ニ ツキ死亡	人口千ニ ツキ結婚	人口一萬 ニツキ自殺
昭和三年	三・四	一〇四	五・三	二・〇	八・〇	二・一
同 四年	三・三	一〇四	五・三	二・〇	七・九	二・〇
同 五年	三・二	一〇五	五・三	一・八	七・九	二・二
同 六年	三・二	一〇四	五・二	一・九	七・六	二・二
同 七年	三・三	一〇五	五・二	一・八	七・八	二・二
同 八年	三・二	一〇五	五・一	一・八	七・二	二・二
同 九年	三・〇	一〇四	五・二	一・八	七・五	二・一
同十年	三・二	一〇五	五・〇	一・七	八・〇	二・〇
同十一年	三・〇	一〇五	五・〇	一・八	七・八	二・二
同十二年	三・一	一〇五	五・〇	一・七	九・五	二・〇



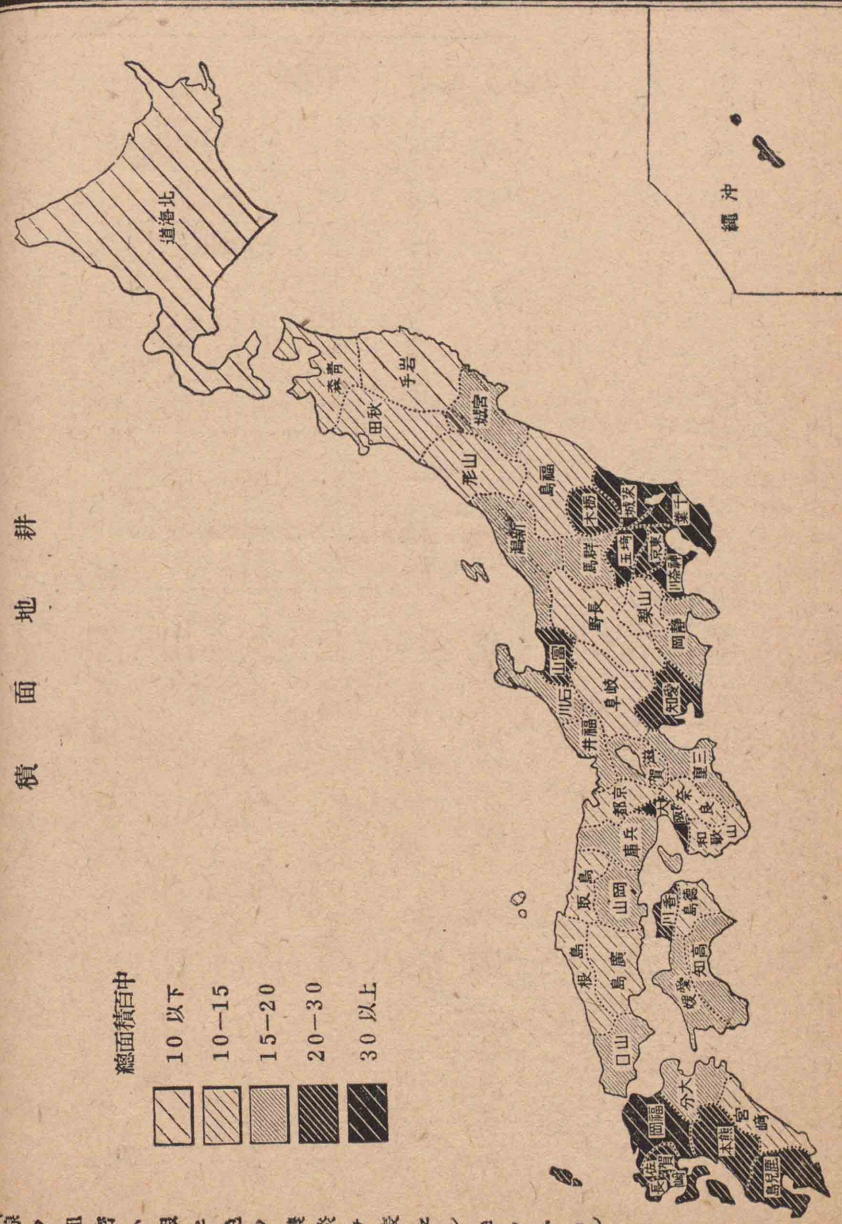
高穫收米年二十和昭



石萬百九 灣臺      石萬百七千二 鮮朝      石萬百六千六 地内

(割ノ石萬百倭一)

よりては、其の國の經濟狀態等をうかゞふべく、又歳入・歳出の統計を見ては、國力の如何を察するを得べし。されば統計は、政治・經濟及び社會上の施設・經營には勿論、自然現象又は社會現象の學術的研究にも亦必要缺くべからざるものなり。これ文明諸國に於て、特種の機關を設け、多額の費用を投じて其の調査を



(緑ノ如ク、八色ノ濃淡ヲ表セルモノナリ)

怠らざる所以にして、我が國に於ても、内閣に統計局ありて、各種の重要なる統計を取り、各省府縣自治團體銀行會社等、亦それ〴〵其の必要なる事項に就きて統計を整ふることに務む。

## 第二十七課 筏流し

紀伊山脈の間を縫つて流れ下る十津川と北山川との沿岸は、有名な木材産地である。随つて此の二川の合した熊野川の川口にある新宮の町には、りつばな製材所もあれば、木材を運ぶ船もたくさんに着いてゐる。製材所の貯木場や川口の附近に行つて見ると、何萬とも數知れない木材が、果もなくぎつしりと水面に浮かんで

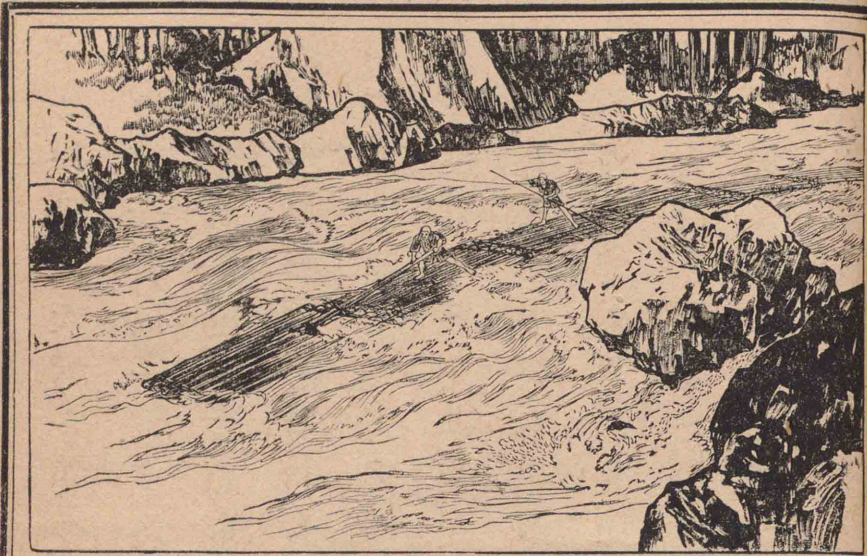
をり、川上からは大きな筏が後から〴〵下つて來る。其の有様は實に壯觀である。

かうたくさん木材が集つてゐるところだけを見ると、わけもなく此處まで運ばれたもののやうに思はれるが、何しろ二十里三十里の山奥で伐つて運んで來るのであるから、決して容易な業ではない。

先づ某の山で幾百本の立木を伐倒す。さうして木の大きさや種類によつては、其のまゝ直に出すものもあるが、多くは五六箇月から一年ぐらゐも乾かして後、山出しにかゝる。

伐出した場所が谷近い處なら、其のまゝ押落すが、谷へ

遠い處では、木材を數本縦に並べて、其の上を順次にすべらせて送り出す。やつと谷へ木材を落しても、多くは木を流す程の水のないのが常であるから、今度は此の谷をせき止めて、氣長に水をためる。其の中に水が次第に増して堰を溢れるやうになると、木材を一本々々流し落す。勿論行く手にも水が乏しければ、幾度でも之を繰返す。若し、又全く谷に水がないとなると、別の方法をとらねばならぬ。それにはたくさんの細い木を二尺おきぐらゐに横に並べて、其の上をそりのやうなものに載せて運ぶのである。



第二十七課 筏流し

さてや、大きな川へ出たとなると、管流しといつて、木材を一本一本のまゝで川へ流す。これが流に随つて幾里か流れ下つて、あばに着く。あばといふのは、川を横切つて鐵線を張渡して置き、上流から流れ下る木材を受止める處で、此處で始めて筏に組む。筏の組みやうは、先づ尺締方一尺長さ二尺の四本を標準として一組とし、

此の一組の木材を幾つもつないだものが一筏になる。いはば一筏は一列車、各組の木材は一輛々々の車に當るのである。筏には大小あるが、先づ八組又は十一組づつつなぐのが普通である。

一筏には通常二人乗つてゐる。一人は前の方で舵をとりながら櫂を使ひ、一人は後に居て竿を執つて筏を操る。若し水が少い時であると、川の途中に閘門のついた堰を作つてあるから、此の門を閉ぢて水をたゞへた後、さつと門を開くと、筏は瀧のやうに流れ落ちる水につれて、矢よりも早く下つて行く。かうしてだんく本流に出るに随つて、水量は次第に多くなり、流は漸く緩く

なる。筏師が此の間の變化極りない景色を縫つて下るさまは、如何にも愉快さうに見えるが、雨露にさらされ、水にひたり、日がな一日水を見つめて、ちよつとの油斷も出来ない身になつては、容易な苦勞ではない。有名な瀧八丁も九里峽も、全く其の眼中には入らないのである。

## 第二十八課 瀧澤馬琴の苦心

瀧澤馬琴は徳川時代に於ける有名なる小説家にして、其の著作二百六十餘種、雜著を合すれば、無慮三百數十種に及ぶ。それ等の中にも南總里見八犬傳の如きは、其の構想の大なる、其の分量の多き、我が國古來多く比



を見ざる大作にして、卷數總べて百六卷、彼が四十八歳より七十五歳に至る二十八年間の努力の結晶なり。随つて馬琴が此の八犬傳を完成するに就きては、涙こぼるゝばかりの苦心こそ傳へらるれ。

元來馬琴は非常の勉強家にして、壯年時代には、早朝より夜の十時に至るまで稿本を綴り、就寢後は更に讀書に夜を更して、時には曉に及ぶこともありき。此の過度の勉強の結果、何時しか健康を害して、八犬傳に筆を執初めし頃は、既に齒抜落ち、逆上、口痛のわづらひさへ起れりといふ。されど謹直にして義理を重んずること堅き彼は、一旦書肆と約せし稿本をなほざりにする時は、出版の時日後れて、利を失はしむること少からずとて、一方に攝生に注意しつゝも、なほ専心其の著述に勉めぬ。

とかくする中、馬琴が六十七歳の秋、右眼俄に明を失しぬ。彼は今更に過去の不注意を悔みつゝも、例の負けし魂より、以後は左眼のみを頼みとして、なほも屈せず著作の筆を進めたり。然るに幾何もあらずして、また左眼も何となくかすむやうなりしかば、或は眼鏡の玉の悪しき故にもやと、水晶製の價高きものをもいとはず買求めて試みしかど、眼疾は益度を加ふるのみ。斯かる間にも、小説の稿は一日も廢することなく、七十四歳の春

までは、ともかくも從來のまゝに一枚十一行の細字を  
書列ねゐたりしが、此の頃より更に病重りて、到底細書  
するを得ず。遂には五行とし四行としたれど、其の大字  
すらも手探りにて記せば、墨の續かぬところさへある  
に至りぬ。馬琴が其の日記中に、「衰眼實にせんかたなし。」  
と歎じ、衰眼かすみて見えかね、唯手加減のみなり。」とい  
へるも此の頃にして、彼が心中の遺憾如何ばかりなり  
けん。されど秋より冬に入りては、其の探り書きすらも  
かなはずなりて、さながら雲霧の中に在るが如く、わづ  
かに東西を辨じ、晝夜を知るを得るのみ。  
斯かる境遇に至れば、多くは失望落膽して、年來の事業

をも廢するが常なれど、彼はなほも志を屈せず、如何に  
しても其の大作を完成して、一は讀者の期待にこたへ、  
一は書肆の利をも全うせしめんことを期したり。され  
ど當時一子興繼は既に歿し、孫は幼くして斯かる助と  
なるべくもあらず。唯嫁みち幸に多少の文字を解した  
れば、之をして口授を筆記せしむることとしたれど、當  
時の女子の學問といふは極めて淺きが常なれば、漢字  
雅言はもとより、假名遣、句讀をも知らず。之を相手とし  
て、一字一句の末までも教へ導く馬琴の苦心は如何ば  
かりなりけん。教ふる者、くちをしの目や。」と歎けば、まし  
て教へらるゝ者は夢中をたどる心地して、困じ果てて

は唯泣くのみなりき。馬琴は其のいたはしきを見るにつけ、幾度か中止を思ひ立ちしかど、一卷二巻と進む程に、みちも漸くに馴れて、苦心初の如くならず、言を費せども舌の疲るゝまでには至らず。斯くして最後の十巻を綴り、馬琴七十五歳の秋八月終に八犬傳はこゝに完成するに至りぬ。馬琴が不屈の精神の偉なるはもとよりになれども、みちがよく之を助けたる功も亦没すべからず。馬琴が其の書の末に記せる文中に、教を受くる者の困じながらも倦まで勉むるにあらざれば、此の十巻を綴り果して、局を結ぶに至らんや。といへるも、宜なるかな。

第二十九課 足柄山

足柄山のよはの月、

空すみ渡る笙の音に、

草木も耳をそばだてて、

谷の眞清水響き合ふ。

新羅三郎義光は

更に祕曲を吹添へて、

取出したる一卷を

時秋が手に渡しつゝ、

「汝が父より傳はりし  
祕曲は之にをさめたり。  
今の調を耳にしめ、  
都路さして歸れ、とく。」

さすが名殘の惜しまれて、

時秋尙も「御後に

從ふべし。」とためらへど、

義光頭をうち振りて、

「我戰場に向ふ身の

野末の露と消えん時、

汝にあらでは此の曲を

誰かは後に傳ふべき。

我は武の爲、家の爲、

汝は世の爲、道の爲、

つゝがなかれ。」と西東

露けき袖を分ちけり。

第三十課 郷土

山川の風光敢へて誇るべきなく、草木の珍奇敢へて語るべきなしといふなかれ。或は坦々たる田園遠く連なる

り、或は山谷に掌大の田園を點綴し、彼處に二軒此處に五軒、川に臨んで、は自ら清流の調を聞き、山間に位しては清風時に薰じ來る。都塵を去る百里、空氣自らさわやかに、碧空の深きを仰ぎ、又は大海の洋々たるを望む。郷土の景色よし奇勝にあらずといふも、しかも甚だ愛すべきものあるに非ずや。

山あり、形頂上に於て缺くるが如きを名づけて九合山といふ。傳へいふ、昔天狗此の山を一夜にして造らんとす、成る所九分にして既に夜明けたりと。沼あり、故老いふ、昔長者一日にして其の田を植ゑしめんと欲す、半ばにして日暮れんとしければ、彼の長者扇を以て落日を

かへせり、夜明けて見れば、廣大なる田地化して此の沼となる。かゝる種の傳説多く荒唐に似たりといへども、古人木訥の心さながらに通ふが如く、しかも冥々の中に郷人を教誨せしもの少からず。

老樹鬱蒼たる境内に神さびて立てる宮居は、たまくと延喜式に其の神名ありて、由緒の古きを知るものあり。郷人氏神と仰ぎ、ひとしく氏子と稱するものは、祖先以來崇敬の厚かりしところ、詣づる毎に郷土の古を思ひ、心自ら純に、氣自らさわやくをおぼえん。

地名必ずしも歴史を語るにはあらねど、時に本莊・新莊・今莊等の名に、莊園の歴史をうかゞふべく、本郷・横田・新

田等の名に郷土發達の跡を尋ねべく、三田市・五田市・二十日市等の名に昔日の商業を思ふべし。平和なる山川田野も、時に兵馬のちまたと化しけん、要害山と呼び、勢引山と呼び、城山と呼び、陣場野と呼ぶ。是等は口碑と結びて戰國の美談を傳へ、又は文書に參酌して歴史の跡を知るべきもの少からず。

道の邊に咲く野菊の花はさゝやかなれども、思へばそもそも何時の世に芽生えそめ、咲きそめにけん。觀ずれば一輪の野花にも殆ど限知らぬ傳統の存在するを認むべし。我等の據つて立つ郷土は、そも何時の世に開かれ、幾百千年を経て今日に到りしものぞ。穰々たる美田

も、もとこれ祖先の手によりて開墾せられ、鬱蒼たる山林、亦其の苦心によりて今日の美を致ししなるべし。我等の父母はもとより、祖父母も曾祖父母もかつて此の郷土に嬉戲し、此の郷土に人となり、彼の田圃を耕し、彼の森林を養ひつらん。一片の月山上にかゝる時、自ら故人をしのびてうたゝ感慨の深きをおぼゆ。

郷土の由來を知り、其の今日に至れる跡を尋ぬる時、始めて之に對する眞の理解を生じ、隨つて之を愛する情の油然而たるものあるを見るべし。祖先の苦心經營を知らば、其の遺業も益、意義を加へ、郷土の産業も其の由來する所を察せば、或は更に之を發達せしむる途あるを

發見せん。故老に問ひ、口碑に尋ね、傳説に察して郷土變遷の大略を知らば、故人も舊知の感あり、悠久たる往時、も之を目前に見るが如き心地すべし。山川すべて情あり、愛郷の心切ならざらんとするも得べけんや。

高等小學讀本 卷一終

高讀農一

昭和十五年十月十六日 修正印刷  
昭和十五年十月十九日 修正印刷  
昭和十五年十二月廿四日 翻刻發行

著作權所有

著作兼  
發行者

文 部 省

高等小學讀本卷一 農村用  
臨時定價 金拾貳錢 わ

昭和十五年十月十三日  
文 部 省 檢 査 濟

發行所

印刷所 東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地  
東京書籍株式會社工場  
東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地  
東京書籍株式會社

翻刻發行 東京書籍株式會社  
兼印刷者 代表者 井 上 源 之 丞

